

選抜試験と高校調査書

大学入試での高校調査書重視の意見から、共通第1次学力試験制度が発足したわけであるが、高校調査書には高校教育到達度以外にも学生個人についての多くの情報が含まれるから、標題のような調査研究には重要な意義がある。

この調査では、まず高校成績と入試成績の関連が考えられる。この中でも、高校成績と大学合格率が最も端的にこの関係を表すが、調査書成績概評、評定平均値のいずれを変数としても、高校成績の良好な者ほど合格率は高い。また、高校での選択科目別に合格率を調査している例があり、理科では生物選択者よりも物理選択者の合格率が高いことを指摘している（帯広畜産大学）。

高校成績と共通第1次学力試験及び第2次試験、その総合点との相関係数調査を実施した大学が多い。共通第1次学力試験と第2次試験成績間の相関が0.6～0.7と高いのに比べて、ほぼ0.3～0.5となっている例が多い。入試教科と同じ高校教科成績の相関を求めている大学もあり、いずれの場合も英語の相関が最も高く、およそ

0.5となっている。

1 高校からの受験者が多い場合、高校別に相関調査を行った例がある（旭川医科大学、秋田大学、東京大学）。高校ごとに値がばらつくが、全体から求めたものよりも高く0.4～0.6程度となる。またこの値の年間変動を調査した例もある。

調査書成績と入学後の成績との相関調査もかなりの大学で実施されていて、この相関が入試成績のそれより高いことが示されている。また概評別留年者、退学者数調査や大学での英語単位取得数との関連調査なども実施されていて（室蘭工業大学、帯広畜産大学）、高校成績との関連の高いことが指摘されている。

この他、調査書記載事項を説明変数とする重回帰分析を行い、入試成績には学習の記録（成績）に属する項目の寄与が大きく、行動の記録の総和は影響が小さいこと、しかし、後者を数値化した値の小さな者は大学成績調査から、学習の成功度が低いことを指摘する報告がある（北海道教育大学）。